

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 戸塚^{とつか}学^{まなぶ}

本論文は堀辰雄の創作活動において西洋文学の翻訳や日本の古典文学の翻案が重要な役割を果たしていた様態を、作品の実証的な分析を通して明らかにしたものである。

構成は全四部と補論からなる。まず第一部では、文壇デビュー作である『不器用な天使』が、ジャン・コクトー『グラン・テカール』を日本語に置き換える作業の中で成立していた事情が明らかにされている。

第二部では、『聖家族』を対象に、レーモン・ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』の翻訳を通し、作中の三つの恋愛を連鎖的に描いていく文体が学び取られていった様態が明らかにされている。さらに『美しい村』を論じた章においては、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』において名詞句、形容詞句が並列されていくスタイルを、堀が巧みに自らの小説文体に取り入れていった様相が明らかにされている。上記の作家たちとの関係については従来から多く指摘されてきたところではあるが、本論の独創はこれを単なる影響関係としてではなく、日本語としてあらたな小説文体を作る糧として、作者がどのように換骨奪胎していったのか、を具体的に明らかにした点にある。

第三部においては、堀の「古典回帰」と言われる作品群が対象に選ばれている。『物語の女』を扱った章においては、王朝女流日記の再評価が進んでいた同時代にあって、作者が女性の一人称回想形式にあらためて着目し、書き手が自己を客体化する手立てとしてこれをいかに利用したかが明らかにされている。モデルの芥川龍之介、片山廣子の短歌が作中にひそかに埋め込まれている、という指摘は、堀が贈答歌をどのように捉え、実作に取り入れようとしたのかを知る上で興味深いものである。また、『かげろふの日記』を扱った章においては、原文に忠実な翻案を行いながら、一方で自称詞「私」「自分」の使い分けを通し、独自の回想文体を生み出していった様相が明らかにされている。

第四部においては、代表作である『風立ちぬ』の構造分析が試みられている。作中の時間構成に注目し、前半三章と後半二章との差違から、「私」と女性主人公が共に生きようとする時間が事後的に作られたものであることが示されているという。それによって恋人と過ごした生前の時間が反復的に立ち現れる効果が生じるという指摘は、新たな作品解釈として傾聴に値するものである。

なお、補論においては、堀の旧蔵書の書き込みの調査から、アポリネール、ラディゲ、コクトーの作品が現実どのように読み解かれていったのかが資料として示されている。

総じて個々の分析の結論が翻訳との関係に特化されがちな傾向が見られるが、文体の生成、という観点から創作と翻訳との関係を具体的に明らかにし得た点は高い評価に値する。

よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。